

眞言行法に於ける心集中について

村 主 恵 快

大日經の頌に、「六大無碍常瑜伽 四種曼荼各々不離 三密加持速疾顯 重帝網名即身」と述べられ、「即身成佛義」にもこの頌句が即身成佛の眞意を單的に表現した最も重要な字句であると力説して、更にこの句は無邊の義を含み、一切の佛法はこの一句を出ないと迄云つてゐるのであるが、中でも現在に至る迄、眞言後學者の注目を引き、その宗教生活に於ける信條ともされてゐるのは、「常瑜伽」の三字と、「三密加持」の四字であらう。

「即身義」は無碍を「涉入自在」、瑜伽を「相應」と翻して、「六大法界體性所成の身は、無障無碍であつて、互に涉入相應して常住不變であり、同じく實際に住してゐる」と解釋して、「加持」は如來の大悲と、衆生の信心との關係を表現したものと考えられ、佛日の影が衆生の心水に現するのを加と云い、行者の心水が佛日を感じる事が出来るのを持と云うのであると解釋して、常瑜伽の句を體、加持の句を用に配置してゐるのであるが、云う迄もなく、「瑜伽」はユウジュ

yu. を語幹とするヨーガ yoga の音釋であつて、之は馬に「くびき」をつける。車に馬につなぐ。との元意から後に、中期ウパニシャッドに屬するカタハ・ウパニシャッド *kaṭha upanīśad* では「五つの知覺器官 jñānāni が意 manas にも靜止し、覺 budhi も亦動かなくなつたとき、人人はこれを至上の境地という。かように諸器官を固く執持すること *sthira-indriya-dharaṇā* を人人は、'yoga' と見なしてゐる。」(Kaṭh. Up., VI. 9—10) と云われ、更に又「高次の心理操作と神祕的體驗を獲得する心身のコントロールの行法を意味するに至り、更に中期に屬するマートリー・ウパニシャッド *mātrī. up.* では六つの支分 *sad-aṅga* からなる修定法を生み出し、その中で氣 *prāṇa* と唸 *om* 音と萬有とを合一 *yunākti* し、……或はみずから合一する *yunākte* する故に、ヨーガと云われている」(Mātrī. up., VI. 25) ののであるが、この大日經に示された瑜伽はどの様な意味に解釋すべきであらうか。この場合、その行法に見られる前期ヨーガ行法的修定法を

一應論外にするならば、それは、ヨーガ的に行法と關係の無い、人間の肉體的構造を馬車にたとえた用法であつて、氣と意の合一を意味するからヨーガと云つたとするマイトリ、ウパニシャッド的觀念と思われる。

この様に今この頃の瑜伽が行者の修定的な作業を意味しないとするならば、その作業は、古來註釋にも見られる如く、即身成佛に於ける用とされてゐる三密加持に負わされたものと見ることが出来る。

然して、この場合の三密は、法佛と行者の身、口、意の三業を云うのであつて、二者の三密が「加持」adhi-sthana されて、その行者の成佛は成立するのである。

即ち、行者の「心集中」に至る修定方法としては、行者が身に契印を結び、口に眞言を誦じ、心中にその祈念する佛・菩薩を念じその功力を持ち、つづける裡に、如來の三力が行者に加わつて (adhi) その如來と同じ能力を保つことが出来る (sthāna) のであらう。

還言すれば、行者の能動的、自覺的な心集中が、宇宙の本體とも云うべき大日如來の能動的 (行者の側から云えば受動的) な力と合一して佛覺を成ずることが出来るのである。

従つて、眞言行者の行う行法は、この三密を如何に、組織的實際的に組合せ、行者の動作、感覺、意識の體驗を通じて、その身そのまま佛覺智に至らしめようか工夫され、その行法

眞言行法に於ける心集中について (村 主)

の多くがインド在來の行法にその起源をとり、今日伝えられる日本眞言宗の行法が形成されたのであるが、弘法大師が唐より請來された經卷の中にすでに、無量壽如來・阿閼如來・佛頂尊勝・普賢菩薩・金剛王菩薩・金剛壽命・一字佛頂輪王・如意輪菩薩・虚空藏菩薩・聖觀音菩薩等の念誦法が存して居つたことは、當時すでに中國に於て、この様な念誦法の組織完成を物語り、その後今日に傳わる諸傳の數多くの加行法、諸尊念誦法、灌頂法がこれらを原形として各流派の人々によつて形成されたと考えられる。

然し、これらの數多くの行法の要素をなしているのは、あく迄諸尊の形像であり、又印契、眞言の三つであることには變りなく、これらのシンボリックな事象はサンスクリットを充分に知らず、ムドラの原姿を見ない我國中世以降と云えども比較的正確に伝えられたのであるが、中國の訓古的教學の網をくぐり抜けて來たそれは、我國に於て宗學の傳統を造り上げるため、より一層のスコラの解釋と體系化を餘儀なくされたことは他宗のそれと其の軌を一にしている。

今、眞言行者の行法を考える時、その行法はすこぶる實際的實感的で、その各々の行法をとつて見ても、行者はその崇信の對稱とする佛・菩薩をその「行場」に招待するに當つて、その觀念に於て先ずその身を清め、祭壇を清淨にし、車を送つてその佛菩薩を歡請し、その四周上下十方を結界し、華座

を設けて、音楽を奏し、各種の供物を捧げて供養し、本尊の呪を念じて、行者と本尊とがその眞言を中だちとして一體となり、所謂本尊に加持せられて、諸福田を成ずる「次第」となるのである。

これら諸供養法に於て、身、口、意の三業何れも一體となつて行せられるのであるが、中でも心呪（ダラニ）は行者の發聲によつて、行者が一種の宗教的エクスタツシーに入る重要な部門を占めるのであつて、ダラニ *dhāraṇī* がその元意を「記憶する」、「暗記する」と云う意味から次第に、「何かある力を持ちつゞける」と考えられ更に、ダラニ自體が一種の神秘的な（呪）力を持つているものと考えられるに至つたのは、この様な宗教的體驗を経た人々にとつては極めて自然であつたと云わねばなるまい。

即ち眞言行者の意識、更に全身全靈的な「心集中」は、心に本尊を念じ、身に印契を結び、口にその眞言を誦する裡に全く自己に没入し、自己を離れて本尊への絶體的歸依に投入することが出来るのであり、この眞言行法に於けるダラニの占める地位は重大で、アダルヴァ・ヴェーダ以來のインドの祈念の方法が種々の翻譯・解釋の裡に埋れながら傳統的修法として保存し、傳承されたことは誠に興味深い事實と云わざるを得ない。

この様に傳統的行法の中心、即ち行者の行い「心集中」の

重大な手だてである各種數多くのダラニも所謂本呪と呼ばれる比較的長句の呪と、略呪と呼ばれる短句の呪を生じ、その記憶の困難さから略呪の方がより多く、そのかわり、繰り返して唱えられることが多く、盛んに呪誦されてはその回數を誇る様になるのであるが、又一方より簡明な日本文によるダラニがその信仰對象を背景に造られたのも自然である。

即ち、ミロクの再生を待ち願つて入定された弘法大師に對する信仰は、餘命のあるまま土中に入つて、所謂「即身佛」となつて入定する眞言行者を續出させ、更に祖師大師に對する信仰は、大師を次第に超自然的靈能を有する佛格を持つ靈的存在として自覺され、大師はすべての眞實を被見せられるとの信仰を生み、法然、親鸞上人によつて開花された念佛三昧の新宗教運動にも比すべき「南無大師遍照金剛」の祈念句を生むに至つた。

そして又、數多くの眞言は種々に整備され中でも十三の佛の眞言は最も親しまれ呪誦されるのであるが、更にこれら諸々の眞言を總攝する功力のある眞言として、光明眞言が特に重んぜられ大師寶號と共に呪誦されるに至るのである。

即ち、眞言行法を通俗化し、僧俗共に佛を禮拜する時、大衆とも唱和し易い簡明な眞言が用いられたのであつて、その場合、印契はただ合掌するのみで所願の佛・菩薩を念じ、略呪眞言を唱和するのであつて、各人の意識はその間に於て次

第にその心奥に沈潜し、やがてはその意識は消え去り、ただその佛菩薩に絶體歸依することによつて、自我は無限なる廣がりをも以て、元の自我から離れ行き、宇宙に遍滿する大日如来の働きの中に包攝されて行くのである。

従つて、行者がその念ずる佛の眞言を誦する時は、その行法、唱和の場が如法、略儀たるを問はず、その行者にとつては最も重要で、神聖な時間であつて、所謂「正念をすえて」、心を構え、自己の發聲する眞言に意識を集中させ、これを繰返し呪する裡に、もともと暗記せられている眞言は行者自身の意識から離脱して之を呪する行者は感覺的な意識世界を抜け出して、自由で執られることのない境地に生きることが出来るのである。

即ち、眞言行法に於ける「心集中」、それが唯に意識のコンストレーションを超えた、全靈的な行法である時、他にも幾つかの手段があるにせよ、熱禱的なダラニの呪誦が解脱の大きな手だてになつてゐることは明らかであり、そのダラニは、それが本呪・略呪・或は寶號たるを問わず、その心呪に全靈を集中させる事により、行者の機根の差違を問わず、種々なる苦惱からの解脱を成就することが出来るのであつて、この様な功力の點からもダラニは矢張り、一つの大きな靈能を持つもの云うことが出来る。

そして又、この様なダラニ呪誦の行法が後には法華經題目

眞言行法に於ける心集中について（村 主）

の高唱、アマダ佛祈念三昧の行法と、その宗教的體驗の様相に於て、興味ある類似性を有していることは、人間の「心集中」に至る共通的な道を示していると考えることが出来るのであるまいか。

◆表題に於ける「心集中」なる意味は眞言行法の成佛が即身の成佛であり、それは唯なる「意識」のみに限らるべきものでなく、全宇宙の一體感を伴うと考へたからである。

- 1 佐保田鶴治博士「インド正統派哲學思想の始源」三八四頁。
- 2 同右、四〇一頁。

新刊紹介（1）

西域文化研究第六「歴史と美術の諸問題」

大谷探検隊將來の古代錦綾類

彌勒下生經變・白描粉本と敦煌壁畫の製作

チベット所傳釋尊入寂の圖相

敦煌本にみられる種々の菩薩戒儀

——スタイン本を中心として——

敦煌出土要行捨身經

敦煌出土法照和尚念佛讚

敦煌出土瑜伽師地論決擇分門記卷第一

吐魯番文書より見たる唐代の鄰保制

ウイグル文賣契約書の書式

歐文梗概

本文三〇二頁 原色三・コロタイプ二二

法藏館刊

定價七、〇〇〇圓

龍村謙	秋山好和	月輪賢隆	土橋秀高	牧田諦亮	佐藤哲英	福原亮嚴	松本善海	山田信夫
-----	------	------	------	------	------	------	------	------